

## 宮澤辰雄先生

横山茂之（生物化学教室）

宮澤先生は、昭和25年に理学部化学科を卒業され、大学院において水島三一郎教授のもとで、タンパク質関連分子の立体構造と振動スペクトル、タンパク質の赤外吸収スペクトルの研究をされました（昭和35年、日本化学会進歩賞）。昭和30年に化学科助手（31～34年、カルフォルニア大学、ハーバード大学に留学）、34年に大阪大学蛋白質研究所助教授、39年に教授に昇任され、タンパク質主鎖の立体構造の赤外吸収スペクトルによる解析法を確立し、高分子の立体構造に関する理論式を導き、振動スペクトルと物理的性質との関連を解明されました（48年、山路自然科学奨学賞）。

昭和46年に東京大学理学部生物化学教室を併任

され、49年より専任になられました。田隅三生先生（現在、化学教室）、高橋征三先生（現在、日本女子大学）、稲垣冬彦先生（現在、東京都臨床医学総合研究所）らと、核磁気共鳴（NMR）により、水溶液におけるペプチド、ヌクレオチドなどのコンホメーションを決定することに取り組まれました（55年、日本化学会学会賞）、私は、ちょうど宮澤先生が生物化学教室に専任になられた49年に、卒業研究で御指導を受け、それ以来、ずっと今日までお世話になってきました。

宮澤先生のお仕事ぶりは、集中して、かつ、それを持続させる、まさに、「がんばる」という感じでした。論文を仕上げる時などはいつも、「今

日はここまでやると決めた」というところまで、何日も夜12時過ぎまでやっておられました。この数年、日曜日に研究室でお顔を拝見しなかったことは、ほとんどありませんでした。時々のテニスと、御自宅との往復の運転（5分ぐらい）だけが、息抜きの時だったのではないのでしょうか。先生は「教育は背中でするものだ」とおっしゃいますが、それは「自分のようにがんばって仕事をするように」ということなのだと思います。

実験室をきれいにすることまで、身をもって実行されました。床磨きや窓ふきも先生の特技で、教授室はいつもピカピカでした。実験室があまりに汚れてくると、先生は、いつのまにか、実験室の床の一角だけを、見本としてピカピカに磨いて下さるので、それに気づいて、あわてて研究室総動員で床を磨くということがよくありました。

先生は、「自分は一点重点主義」とおっしゃって、その典型は、先生によると、女性は奥様、スポーツはテニスということ。かなりの凝り性で、最近、パソコンのリレショナルデータベースに凝っていて、会長を務められた分光学会の会員管理、研究室の会計などのプログラムを御自分で作ってしまわれました。「完璧主義」で、論文も実にきちんと作るのを好まれました。

先生は、英語がとても達者で、書く方も、話す方も、たいへんなものです。われわれが日本語で話している時に、英語の単語を日本語風に発音してしまうと、先生は、「英語で話すときにもそのくせがでてしまうから」と、必ず直されました（「ツー」でなく、twoなど）。先生の英語の講演は、とてもみごとでしたが、2～3週間前から

きちんとした原稿を作って、それから、毎日、少しずつ改良しておられたようです（日本語の講演でも同じでした）。ところが、本番の講演では、原稿をそっちのけで、調子に乗ってしゃべってしまわれることもあったようです。何につけても、先生の準備の良さは抜群で、あまりに用意周到なのでおどろくことがしばしばでした。しかし、先生の用意周到さは、むしろ、細かいことの心配をせずに、思い切ってやるためなのだと思います。

研究方針でも、思い切った方向転換をされて、みな驚かされました。あれほど大きな業績をあげられた振動分光学からはすっかり遠ざかり、「今の目的にはNMRの方が適当である」と乗り替えてしまわれました。このごろは、「どのような生命現象を解明するかという目的をもって、それに必要なことは何でもやるのが重要であって、物理化学だからやるとかやらないとかいうのは意味がない」とおっしゃいます。研究テーマを考えて先生にお話すると、「やりたいならいい。だけれどどういう意義があるのか」と必ず質問されました。はやっているから、はやいそうだからやるというのがお嫌いで、独自の目的、意義などをはっきりさせていないと厳しく叱られました。そのかわり、難しいテーマでも、目的がはっきりしていれば、がんばるように励まして下さいました。

このような先生の研究に対する姿勢は、先生御自身の歩んでこられた道に、まさによく現れていて、先生は、いつも自信を持って「背中で教育して」下さっているのだと思います。宮澤先生、本当にありがとうございました。いつまでもお元気で、これからも御指導をお願い致します。